資料渉猟余話

その53

「木下釣月」子規を慕う夭折の俳人

竹村雄次

叱る人叱らるる人と
　火鉢かな

明治時代の俳句である。「叱る」という言葉に厳格な明治の父親、あるいは上司の姿が見える。叱られているのは子どもか、部下か。しかし、その間には火鉢。二人は手をあぶりながら叱り叱られているのだ。その姿を想像すると、何か微笑ましい明治の一風景になってくる。作者の優しい眼差しが感じられる。

この句の作者は木下釣月。明治31年、正岡子規が編集に係わった雑誌『ほととぎす』と新聞『日本』の両方に掲載された作品である。

釣月（齊）は明治13年竜丘駄科の生まれ。下伊那の地から子規を慕い、幾多の俳句を作り投句していた。しかし、その生涯は短く明治33年わずか21歳（数え年）、肺病で亡くなっている。生家に残る釣月の写真はその作品と同じように優しい。

釣月については小林郊人著の『信濃の俳人』に「天才的青年俳人」「日本の俳句欄にも、又ホトトギスにも入集して子規に見出され」た、と紹介されている。しかし、現在その作品は同書にある二十句しか読むことができない。そこで『ほととぎす』や『日本』それに所属していた飯田の松聲會の日誌を当たってみた。確かにそこには子規などに選ばれた三百以上の句が発見できた。

今回、調べて驚いたのは、明治30年という初出の早さである。この時期の下伊那からの掲載は釣月だけである。しかもそれが中学を出たばかりの青年で、雑誌・新聞の申込から投句までを一人で行ったということになる。この青年の熱意のほどを感じてしまう。それほどまでに釣月を駆り立てたのはやはり正岡子規の存在であろう。

生家には子規からの手紙や年賀状が残るが、右の手紙は釣月が送った長月集という俳句集への御礼のものである。長月集は釣月の作った手作りの俳句集と考えられる。子規を慕い子規に認められることを夢見ていた釣月。目標に向かって一直線な青年の姿が見えてくる。

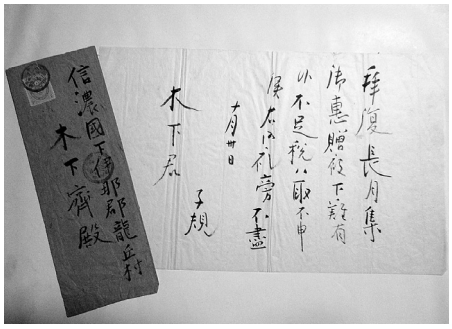
それでは今回発見した作品を紹介しよう。釣月作品の特色を一言でいえば青春俳句である。この年齢の人にしか作れないような瑞々しい俳句。そこに子規の説く写生が実践され、さらにこの人の持つ優しさが加わり親しみやすい作品を生んだ。「草籠に片足折れし亀這ふ」「蛇の子は草にかくれて風涼し」「椽かわに雞かけりふゆのあめ」「草枯や狐に出会う山の裾」ほほえましい句である。

また、子規の教えを受け与謝蕪村に学ぶ姿も見られる。「葬禮の町を東す春の月」「菜の花に日は落ちかかる行く手かな」「うれしさの清水見つけり山路哉」「畑となりし御城の跡やいかのぼり」当時、子規が『俳人蕪村』を『日本』に連載していた。その記事から蕪村を学び自らの世界を表現した作品と言えよう。

明治という時代を感じさせる作品もいくつかある。「葉柳やお濠のふちの電氣燈」「郵便の配達通る枯野哉」「たたずみて軽気球見る日永哉」「写真機を岡に立てたる実り稲」新しい題材を入れた句である。また、「茶の花や畑となりたる士族町」「城跡へ帰る鴉や夕霞」など過ぎ去った江戸時代を思うような句もある。

それにしても三年ほどの期間に多くの句を作り、中央に挑戦した若者の力に驚かされる。しかし、その活動が死によって途絶えてしまったのが何とも残念でならない。まだまだ沢山の秀逸句がある。機会があれば紹介したい。

木下釣月



子規の手紙　明治31年
（写真はともに駄科・木下幹夫氏蔵）